

さいたま市議会 オリンピック・パラリンピック競技大会支援

特別委員会 オープン委員会記録

平成30年3月21日（水）

開 議（午前10時00分）

○**渋谷佳孝委員長** ただいまより、さいたま市議会オリンピック・パラリンピック競技大会支援特別委員会オープン委員会を開催いたします。

開会に当たりまして、委員長を拝命しております私、渋谷佳孝より一言御挨拶を申し上げます。

本日は大変お寒い、冷たい雨の中、このようにたくさんの方に足を運んでいただきまして、まことにありがとうございます。

2年後の7月24日に東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開幕を迎えます。2年3か月後に控えた状況の中、バスケットボールとサッカーの2会場が予定されており、埼玉県でも4種目が予定されている状況でございます。

そのような中、さいたま市議会でも、このオリンピック・パラリンピック競技大会支援特別委員会を設置し、12名の委員でオリンピックに向けて盛り上げていこうという議論を進めさせていただいているところでございます。委員の皆様から、ぜひ市民の皆様とこのオリンピックの盛り上がりと一緒に取り組んでいこうではないかという御意見があり、このオープン委員会を開催させていただき運びになった次第でございます。

本日は、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の事務総長であります武藤敏郎様にお越しいただき、基調講演を賜る予定でございます。

武藤事務総長は、さいたま市の北浦和小学校の御出身でございます。きょうご本人様がお越しになっておりますけれども、武藤様のお兄様を通じてこのような御縁をいただいた次第でございます。なかなかお話が聞けない方でございますので、きょうは私自身も大変楽しみにしていた次第でございます。

また、本日は議長の新藤信夫議長、そして井上伸一副議長にもお越しいただいております。この後御挨拶を賜りたいと思います。まことにありがとうございます。

きょうを機会に、より一層オリンピックに向けて市民の皆様と盛り上がっていけるような機会になればと思っております。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、ここからは司会進行を玉井副委員長にお願いします。

○**玉井哲夫副委員長** 皆様、おはようございます。

私、本日進行を務めます副委員長の玉井哲夫でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

また、今委員長から御案内がございました、さいたま市議会議長の新藤信夫議長、そして井上伸一副議長もおみえになっております。代表いたしまして、新藤信夫議長から御挨拶をいただきたいと思っております。

○**新藤信夫議長** 皆さん、おはようございます。

ただいま御紹介をいただきましたさいたま市議会議長の新藤信夫でございます。

本日は多くの皆様がこの雨の中おいでをいただきまして、大変うれしく思う次第でございます。

きょうは、オリンピック・パラリンピック競技大会支援特別委員会オープン委員会ということで多くの皆さんに御案内を申し上げたところでございますけれども、こういうオープン委員会というのは、さいたま市議会としては多いときで、年に二、三回ございますけれども、なかなかオープン委員会という意味が御理解いただけるかどうか分からない部分がございます、多くの方々に来ていただこうと我々議員としても思っているところなのでございますけれども、期待したほどではないということでございますが、きょうはこれだけ多くの皆様においでをいただきました。ありがとうございます。

さて、平昌オリンピックも終わりました3日ぐらいたつのかな、いよいよ次の東京ということで、これから話も盛り上がってくるのかなと思いますけれども、さいたま市議会では、この特別委員会を平成27年に立ち上げました。リオオリンピックの前から東京オリンピックを盛り上げていこうと。また、さいたま市で行われる競技に関してどうかかわっていくかということも協議させていただいたところなんですけれども、なかなか実感としてわかかなかったというところがあります。私もその一員として1年間参加をさせていただきましたけれども、そんな状態でした。いよいよ平昌も終わりますとあと2年ということになります。

調べてみましたら、オリンピックの開会日まで856日、そしてパラリンピックの開会まできょうを含めて888日、888で大変めでたいようでございます。こうした記念すべき日にこういう委員会が開かれるということは大変いいことだなと思っております。

きょうは大会組織委員会の武藤事務総長にもおいでいただきまして、貴重なお話がいただけるものと思っておりますし、またその後、オープン委員会ということで委員同士の話もさせていただきたいと思っておりますので、皆さんにはオリンピックまで、このさいたま市、そして市議会がどういう意識を持って当たろうとしているのかご理解をいただければありがたいと思います。

きょうは御期待に沿えるかどうかわかりませんが、皆さんの意識の高揚を図れればと思いますので、どうぞよろしく願いいたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

本日は御参加ありがとうございます。

○玉井哲夫副委員長 ありがとうございます。

それでは、本日の講師を御紹介させていただきます。

本日の講師は、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会事務総長、武藤敏郎様です。

武藤様はさいたま市出身で、東京大学法学部を卒業後、旧大蔵省に入省、財務事務次官、日本銀行副総裁等を歴任され、現在は株式会社大和総研理事長でおられます。

また、2014年1月24日より公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会事務総長に就任されております。

それでは、武藤様に「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会と日本の未来」についてお願いいたします。

○東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会事務総長 御紹介にあずかりました武藤でございます。

さいたま市議会の皆様方を初めといたしまして、さいたま市の関係者の皆様には東京2020オリンピック・パラリンピックの準備等に当たりまして大変お世話になっております。この場をおかりいたしまして心から御礼を申し上げますとともに、今後ともよろしく御協力のほどお願いを申

し上げます。

御紹介の中でありましたとおり、私は北浦和の出身でございまして、さいたま市の皆さんからこのような御要請をいただきまして、喜んでお受けした次第でございます。

先日、平昌冬季オリンピック・パラリンピックが開催されました。3回ばかり開会式等を含めまして平昌に行ってまいりました。いろいろな印象がありますけれども、大変勉強になったといえますか、教訓を得たと思っています。運営の裏側を見せていただきました。

さて、1964年、前回の東京オリンピック大会、埼玉県では当時大宮市でサッカーの予選が行われました。皆さん見たことがおありかどうか、ここの方の大半はその後のお生まれの方が多いうに思います。私は大学3年生で、どこの国の試合だったか忘れましたが見に行きました。50年以上前のことですが、まさかこのような形でオリンピックに携わることになるとは予想もしませんでした。

東京2020大会の概要を申し上げますと、ここにもありますとおり、オリンピックは17日間、パラリンピックが13日間、選手数はオリンピックでは1万人を超える、パラリンピックでも4,000人を超えます。競技数と種目数はここにありますとおりでございまして、パラリンピックのほうが種目の数は多くなっています。種目数というのは金メダルの数と一致いたします。競技というのは、例えば水泳という競技になりますと、競泳の中の100メートルの自由形だの、平泳ぎだの、リレーなど、そういう単位が種目でございます。水泳というのが競技の名前ですね。

パラリンピックの場合には同じ100メートルでも障害の程度に応じて違った種目になっておりますので、メダルの数が多くなります。

現在、組織委員会の職員数は1,300人でございますが、2020年には8,000人になります。後ほどお話ししますが、ボランティアは、大会ボランティア、都市ボランティア合わせて11万人でございます。

競技会場40会場、都外には17会場があり、観客数はオリンピック、パラリンピックそれぞれで780万人、230万人と予想されておまして、参加国は200カ国を超える、パラリンピックでも160カ国。1964年の東京では100カ国未満、九十数カ国でございました。

チケットの売り上げは820億円程度を想定しております。

1964年の東京大会は、第2次世界大戦後19年にして日本で開かれ、当時、世界的には、あの敗戦国日本が本当にオリンピックを開催できるのであろうかというような状況でありましたが、これを見事に成功させたわけでありまして。ただ、参加国の数とか観客の数とか、2020年大会に比べるとあらゆる面ではるかに小規模なものでございまして、我々、2020年の大会の参考になるかどうかという、余りありません。

といいますのは、当時はアマチュアリズムで、プロは参加しなかったんですね。今はプロが参加してスポーツ界の最もレベルの高い競技が行われるということで、スポンサーシップが成り立っているわけですね。我々組織委員会はそのスポンサー収入、チケット収入で運営されているものでありまして、税金を使っているわけではございません。

この2020年の東京大会の特色を少しお話ししておきたいと思うのですが、キーワードとして3つあります。1つは若者、もう一つは都会的、第3番目が男女平等というこの3つでございます。

若者というのはどういうことかといいますと、例えばスケートボードでありますとか、スポー

ツクライミングでありますとか、サーフィンでありますとか、1964年当時には想像できなかったような種目が入ってきておりまして、これらはみんな若者が得意とする競技でございます。世界的に若者のスポーツ離れといったようなことが課題になっており I O C にとっても、若者をどのようにオリンピックに引きつけるかということが一つの大きな課題になっているわけでございます。

第2番目の都会的というのはどういうことかといいますと、バスケットボール、これはさいたまスーパーアリーナで行われますけれども、3人制バスケットボールというのも行われることになりました。これは東京の湾岸部で行われるんですけれども、テンポが速い、しかも大きな会場をつくらない、いわばストリートの片隅にある公園で3人制バスケを音楽とともに、簡易におもしろくやる。若者が集まってきて楽しむと、そういうコンセプトでございます。

男女平等、これは東京大会の選手数において、男女半々になりました。しばらく前は大体男子のアスリートが6割ぐらいを占めていまして、どちらかというとな女性は少なかったわけでございますけれども、今は女性も男性と同じように、例えば格闘技においても全部女性の種目があります。ボクシングにも女性の種目があります。むしろ女性にはあって男性にはないという競技が一つだけあるんですね。皆様おわかりになりますでしょうか、シンクロナイズドスイミング、これが男子種目がないんです。しかし、男女平等というものを標榜する以上、いずれ男子のシンクロナイズドスイミングが採用される日が来るのではないかと推察いたします。そういうことで、男女平等は非常に重要なテーマとなっています。

東京大会から野球が採用されましたが、野球そのものは女子がないですね。しかし、ソフトボールは女子だけの種目でございますので、野球、ソフトボールをワンセットにして東京は採用することにしております。

埼玉県で実施される競技は4つあります。ゴルフ、サッカー、射撃、バスケットボール、さいたま市の中ではサッカーとバスケットボールでございます。ゴルフはリオから種目になりました。112年ぶりの復活です。

きょうは、さいたまスーパーアリーナの方々も来ておられますけれども、埼玉県でこの4つの競技が行われるというのも1960年には考えられなかったことかと思えます。

さて、これからは我々が大会運営のために準備をしていることということを簡単に御紹介をしたいと思います。

まず施設ですね、競技施設、ここには仮設と書いてありますけれども、実は仮設は組織委員会が準備しなければなりません。恒設の施設等は国ないしは東京都が準備をするということになっております。オリンピック・パラリンピックを開催するのは東京都なんですね、国ではありません、組織委員会でもありません。組織委員会はそのうちの運営部分を担うということでございます。

ここに掲げられている幾つかのことは、実は組織委員会がやるべきことをまとめたものなのでございますけれども、例えばビーチバレーでありますとかアーチェリーでありますとか、施設を恒設でつくっても、その後利用が望めないものについては仮設でつくります。終わった後は取り壊してしまうということでございます。

恒設は、例えば現在建設中でございます新国立競技場、そのほか東京都がつくっておりますポートの会場でありますとか、カヌーの会場、その他いろいろあります。現在は極めて順調に進ん

であります。一時、2020年大会に間に合うのかといったようなお話もありましたが、順調に進捗しております。2020年を待たずに2019年中には全て完成する予定となっております。

大会運営するためにと、その施設の周りにはたくさんのプレハブ、テントも必要になります。それから競技が夜になることがありますので、照明が必要になる。あるいは観客用の座席をオリンピックのときだけ少しふやさなければならぬ、仮設だけで15万席程度ふやさなければなりません。それから、周りにはセキュリティーのフェンスを張りめぐらせなければいけない。電源、これはちょっと何のことかおわかりにならないかもしれませんが、運営に当たりましてはエネルギー源としての電力、これが非常に重要になります。リオの大会では競技場内で一時停電が発生いたしました。そういうことが絶対にあってはいけないということで、電源ケーブルを2本引くことになっています。1本がダウンしてももう1本が機能するように。さらにその上で、自家発電の電力等も準備することになっています。

それから、ウォームアップエリアといって本番の競技の前に選手がウォームアップするところ、例えば新国立のお隣には陸上競技用のサブトラックをつくらなければいけません。このサブトラックは仮設でございますので、終わった後は取り壊すことになっております。

もう一つの大きな課題は輸送であります。例えばベイエリアにあります選手村からさいたまスーパーアリーナにバスケットボールの選手を運ぶ、これは高速道路を使うわけでございますけれども、渋滞が起これないように交通整理をして、ただ運ぶだけではなくてオンタイムに運ぶということが非常に重要になっています。2020年大会時には、まず、バス1,450台を借りられなければいけませんし、乗用自動車も2,900台ばかり借りられなければいけません。自動車と同時に運転手も雇用しなければなりません。その自動車を置いておく車両基地、これも必要でありますし、競技場の周辺にもおろした後、停車するための会場周辺の駐車場も必要になります。いろいろな交通の標識、これもつくらなければなりません。

築地市場の跡地はこの車両基地になる予定でございます。移転が2年おくれております。小池知事は、今年の10月に移転するという方針を明らかにしていますが、その後は築地市場の跡地が、駐車場で使えるような状況になるかどうか、まだ必ずしも確定はしておりません。

さらに重要な課題として、セキュリティーがございます。1972年のミュンヘンオリンピックにおいて、パレスチナゲリラによるテロが発生しました。選手村にゲリラが入ってきてイスラエルの選手十数名が殺されるという大事件が起こりました。それ以来、オリンピックというのはセキュリティーが極めて大事だということが認識され、この分野に非常にお金も人手をかけるようになりました。我々は50カ所の警備の指揮所を設けて、2万人以上の警察官の協力を得、さらに民間ガードマン1万4,000人、セキュリティーのカメラを張りめぐらせてセキュリティーに万全を期したいと思っております。

セキュリティーという観点からは、この左下にありますサイバーセキュリティーが非常に重要であります。平昌では、開会式のときに、どこからかはまだ特定されていないのですけれども、大規模なサイバーテロが起こって、半日間システムダウンとなりました。これは余りにもショッキングなことだったので、報道はほとんどされておられません。幸いにも翌日のゲームには何とか間に合った。ただし、完璧な姿で立ち上げることができなくて、部分、部分で対応するといったようなことになったようでございますけれども、サイバーセキュリティーが極めて重要なことを示した事例であります。

その対象となるのはテクノロジーでございます。オリンピックでは様々な情報システム、通信インフラ、音響・映像機器が準備され、非常に複雑なIT環境が張りめぐらされます。1964年当時はこういうことはありませんでした。今のオリンピックはIT産業によって成り立っているということです。平昌を見ても、スキー選手がゴールに入った途端、何秒、コンマ2桁まで直ちに表示される。あれはITシステムによってでき上がっているわけでございますけれども、順位が瞬時にして入れかわる、見ていておもしろいと感じます。

ということで、テクノロジーについてここに記載してありますが、さまざまな準備が必要で、コストがかかる分野となっています。その他さまざまなオペレーション、選手村でありますとか、宿泊、飲食、医療、ドーピング等々の準備があります。

例えば飲食について申し上げますと、選手村には先ほど1万1,000人ぐらいの人が泊まっているという話を申し上げました。選手村のレストランでは、朝起きて1時間ぐらいの間に1万食を提供しなければなりません。したがって、日本のシェフがおいしい料理を腕によりをかけてつくるなんていう余裕は全くありません。すぐに提供できるようなサービスにならざるを得ない。1時間に1万食出せるという業者が日本にはいません。世界にも二、三社しかないですね。その人たちとの契約を結ばないと、食事もなかなかできない。しかも、アレルギー対策でありますとか、ハラルの食材を準備しなきゃいけない。さまざまな課題がこの飲食一つとってもあるということでございます。

聖火リレー、これは皆さん大変興味があると思いますが、今検討中でございます。間もなく、4月にも概要が公表にされると思います。

一言申し上げておきますと、聖火リレーは大体100日ぐらいで終わらなきゃいけないということになっておりまして、かつ一筆書き、聖火を分けてはいけないうですね、聖火は一つ、したがって日本に到着したら一筆書きで全国回る。100日と申し上げましても47都道府県、2日で回っても94日かかってしまうんですね。100日を何とかオーバーすることを認めてもらいたいということで、今IOCと交渉中でございます。

聖火リレー一つとってもそういうさまざまな問題がありますが、埼玉県の中でどこを通るかということは埼玉県にお任せしたいと思っております。それぞれの各県の中でどのようなルートをとるかは各県に決めていただくというつもりでございます。

開閉会式、特にオリンピックの開会式は非常に注目的であります。平昌でもそうございました。特に東京は、きっと相当の科学技術の粋を生かしたおもしろい開会式になるのではないかと期待を受けておりますので、我々は、8名をプランニングチームとして選びまして、現在議論していただいているところでございます。右の一番下に書いている山崎貴さん、3丁目の夕日で有名な映画監督ですね。最初の川村元気さんは「君の名は。」で有名な人です。いずれも若い人たちでございます。

老大家による演出というよりは、若い人たちによる演出というようなことを考えていきたいと思っております。

以上が運営のための基本的な問題でございます。2020年で大体どういうことが行われるかということを紹介いたしました。一方、今から2020年までの間にどういうことが行われるか、これを我々はエンゲージメントというふう呼んでおります。これも詳しく申し上げますと時間がかかるのでございますが、初めに、この間発表しました大会マスコットについて触れさせていただきます。

す。この一番左のアというのが10万9,000票集めまして選ばれました。小学校のクラスで投票するというアイデアはオリンピック史上、東京が最初でございます。投票に参加したクラスが20万クラス、日本には大体28万クラスぐらいありますけれども、20万クラスの方が参加していただきました。我々が期待した以上に皆さん大変関心を持っていただいて、しかも投票するに当たって、クラスで授業が行われ、オリンピック・パラリンピックの意義といったようなことを先生方から教えていただいた上で児童がいろいろな議論をして選んだということで、参加した児童は、その後幾つになってもきっと忘れないであろうと思っている次第であります。

ボランティアは今年から募集を開始いたします。大会ボランティア8万人、これは大変な人数ですね。ボランティアに参加したいと考えておられる方はたくさんいるんですけども、いざ実際にボランティアをやるとなると、これは大変なことなんです。

まず、十分な研修を受けなければなりません。観客にどのように接するかということが非常に大事であります。外国人観光客にしてみると、日本に来て、初めて大会関係者と触れるのはボランティアの人たちなんですね、このボランティアの人たちがすばらしい人たちだと思われるか否かによって、東京大会が成功するかどうかが決まると言っても過言ではありません。ボランティアにぜひ応募していただきたいと同時に、今年募集をしたら来年には8万人を人選いたしまして、そこで1年かけて研修をすることになります。

ボランティア活動は1日だけではありません。全期間を通じてボランティアをやるという方ももちろんいるでしょうけれども、少なくとも10日間程度はボランティア活動をしていただかなければなりません。ユニホームなどは支給することになりますが、ボランティアですからお金ももらえないわけではありません。

ボランティア文化を根づかせるということもこのオリンピックの一つの意味ではないかなと思っております。

チケットについて、皆さん方の中にはいつ販売になるのか、どのぐらいの値段なのかと気をもんでいる方もおられると思います。招致の段階ではオリンピックでは780万枚、パラリンピックで230万枚、合計1,010万枚のチケットを売って820億円の収入を上げるということを宣言して立候補いたしました。これをもとに改めて現在検討しているわけでございますけれども、座席の数は大きくすれば大きくするほど観客数はふえるんですけども、費用もかかるんですね。ですから、大きければ大きいほどいいとは我々は思っておりません。適正な規模にしなければいけない。まずそこから議論を始めています。

開会式のチケットとなると、これはやはり相当高くなりそうですね。しかし、気軽に家族4人で1日過ごしたいという人が十分買えるだけの安いチケットも、競技によりますけれども用意したいと思っております。プライシング、すなわち価格をどうするかということも今議論しているところでございます。

それから、メダルでございますが、このメダルを我々は使い終わった携帯電話、小型家電から取り出した金、銀、銅によって100%メダルをつくろうと考えています。これは都市鉱山という言葉がありますが、この都市鉱山からつくるメダルということで、現在、携帯電話が約240万台集まっておりまして、自治体では6,000トンの小型家電が集まっておりまして、都市鉱山からつくる100%のメダル、これもオリンピック史上初めてのことです。

携帯電話の中には金はかなり含まれているので、もう既に金は所要量目途が立ちました。ただ

銀がなかなか集まらないんですね。というのは、銀メダルは全体が銀でできているんです。金メダルはメッキでございまして使う量がはるかに少ない。銀がなかなか集まらない。銀は特に携帯電話ではなくて小型家電のほうに多く含まれておりますので、ぜひ、さいたま市、埼玉県におきましても、このメダルプロジェクトにご協力いただければと思います。

2020年のオリンピック・パラリンピックが始まる前、4月ごろから7月までの間、日本フェスティバルというものを展開しようと思っております。ちょうど聖火リレーと時を同じくして、聖火が行くたびにその地域においてさまざまなフェスティバルが行われる。これはお祭りでもいいですし、スポーツ大会でもいいですし、何でもいいんですけれども、そういうことを計画しようと思っております。

それから、参画プログラムといいまして、関係自治体等が計画するプログラム、組織委員会はこれを公認して、左にありますとおりオリンピックマークを使うことができるようになっていきます。それから、右にありますとおり、より多くの方が参画できるよう、非営利団体であれば応援プログラムとして、組織委員会の後援を差し上げ、特別のマークを使えるようにしています。事柄はここにある8分野でございすけれども、埼玉県は既に県で45団体が登録し、うち10団体がさいたま市でございす。プログラムのアクションの数が981件ということで、かなり盛んにやっております。大変ありがたいと思っております。

昨年の夏、夏祭りに向けて1964年の東京五輪音頭、三波春夫さんが歌ったものを東京2020大会用にリメイクいたしました。1964年の前はローマだったんですね、ですからローマがどうのこうのという歌詞が出てくるんです。2020年にあわせて、その範囲内で歌詞を若干修正しております。これはもう既に発表しており、ユーチューブなんかに出ております。それから踊りの振り付けも全く新しいものをつくりました。ぜひ皆さん、今年の夏祭りにもこれを使っていたいただきたいと思います。

その際、浴衣、はっぴ、うちわも作製してあります。これはまことに申しわけないんですけれども実費はいただかなければならないのですが、もしお使いになりたいということであれば組織委員会に連絡していただければ、有料になりますけれども御協力をしたいと思っております。

さて、残り時間が少なくなってまいりましたが、2020年の大会運営のためにどんなことが課題であるか、それから2020年に向けて今からどんなことをやっていくかということをご申上げました。しかし、一体、東京2020オリンピック・パラリンピック大会は日本社会にどんな影響を及ぼすのだろうか、これが一番大事なことであります。

スポーツというのは、これは不思議な力を持っていますね。あの平昌で小平選手が金メダルに輝いて、大変金を期待された韓国の選手が銀メダルで泣き崩れたんですね、それに対して小平選手が近寄って行って、私はあなたをリスペクトしています、尊敬していますというようなことを言ったということがインターネットのニュースなどで広まりました。みんな感激をいたしたわけです。まさに、シナリオにはない、誰かがつくったシナリオではない感動を与える力がスポーツにあると実感しました。

しかし、こうしたスポーツの価値をさらに超えた価値を生み出すことも私は東京2020大会には必要ではないかと思っております。例えば、文化芸術などの分野、それから東京で行われるオリンピック・パラリンピックでありますけれども、東京を超えて北海道から沖縄まで津々浦々にいろいろな影響も及ぶものでございす。2020年で線香花火のように終わるのではなくて、その後

レガシーとして日本社会に何を残すことができるのか、ここが最も重要なことであります。

1964年のオリンピックでは、よく言われるとおり、高速道路、新幹線といったような目に見えるといいですか、ハードのレガシーが残りました。これはこれで今日我々もそのレガシーの恩恵にあずかっているわけでありまして、大変価値のあるものです。2020年に同じような発想をしても、これは少し時代が違うのではないかと思います。

それでは、2020年のレガシーは何なのか。ソフトなレガシーというんでしょうか、ハードでないものを大事にしたいと思います。

第1は、CO₂の問題などが今非常に問題になっています。先ほど申し上げましたとおり、廃物利用して金、銀、銅を集めてメダルをつくる、これは環境問題に対する配慮ということも言えるわけでありまして。少し難しく言いますと、我々の社会が持続可能性があるということが非常に重要で、使い捨てて資源を無駄にしてはいけないということでもあります。英語ではサステナビリティということなんですけれども、私は、オリンピック・パラリンピックの中で何が一番大事なんだと聞かれたら、ちゅうちょなくサステナビリティ、持続可能性ということが一番大事なコンセプトだというふうに思っております。

もう一つ、これはパラリンピックと関係するんですけれども、ユニバーサルデザイン、言いかえますとバリアフリーの街づくりがあげられます。バリアフリーというのは例えば段差をなくすとかそういうことなんですけれども、これは和製英語でして、英語ではユニバーサルデザインというんですね。このユニバーサルデザインの都市づくり、住宅づくり、交通網をつくり上げる。誰でも、障害者、健常者を問わず利用ができるようなまちづくりをするということも重要ではないかと思っています。

これも難しい言葉で言うとアクセシビリティというんですね。アクセシビリティというのは、日本語で言うとなかなかぴったりの言葉がないですけれども、バリアフリーと言ってもいいかもしれません。しかし、バリアフリーよりももっともっと広い意味を持つ言葉なんです。例えばホテルなどでは車椅子で泊まれるホテルの部屋というのは日本には極めて少ないんです。ヨーロッパに対比して極めて少ない。それをもっともっとふやしていかなければならない。車椅子の方が入ろうと思うと浴室のドアを少し広くしなければいけない。車椅子が滑らないような、そういう特殊な状態をつくらなければいけない等々でお金がかかるのでございますけれども、そういうアクセシビリティも配慮しなければなりません。

第3番目に、オリンピック・パラリンピックのときにはいろいろな人が日本に来られます。200カ国を超える世界にある国と地域は全て参加して来るわけでございます。宗教も違う、政治体制も違う、文化も違う、食べ物の好みも違う、しかも健常者も障害者もいる。そういう人たちがみんな集まったときに、多様な人々というものをお互い認め合って、尊敬し合って、お互いが充実した人生を送れる、あるいは日本で充実したときを過ごせる、そういう社会をつくっていくことも重要です。もしそれに成功すれば、2020年以降、日本の社会は大きく変わっていくことになるのではないかと思います。

これも英語になってしまうので恐縮なんですけれども、国際的にはインクルーシブソサエティなんていう言葉がはやってます。このインクルーシブというのは日本語になりにくいのですが、あえて訳すと包摂的となるわけですが、全てのを包み込むということなんです。全てを包み込む社会をつくっていくということでございます。

2020年のオリンピック・パラリンピックに対して、お金がかかるからやらないほうがいいという意見もあります。いろいろな意見ありますが、我々は手を挙げて日本でやりたい、東京でやりたいということを言った以上、これを成功させて、しかも2020年の後、日本の社会を変えるような、そういう画期的な日本社会の一種の跳躍台というんでしょうか、スプリングボードになることができればすばらしいのではないかと思う次第でございます。

時間となりましたので私の話はこれで終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

○玉井哲夫副委員長 武藤事務総長、大変ありがとうございました。

何かあっという間の時間だったなと感じております。

それでは、せっかくでございますので、質疑応答に移りたいと思いますが、委員の皆様から何かございますでしょうか。

野口吉明委員

○野口吉明委員 委員の野口吉明でございます。よろしくお願ひいたします。

大変失礼とは思いますが、さいたま市出身の事務総長ということで親しみを感じながら聞かせていただきました。

当初大変御苦勞が多かった、例えばエンブレムとか新国立競技場であるとか、そういったハードの今回の準備体制になりましたけれども、ただいまの御講演をお聞きいたしまして、順調に進んでいるのかなと安心いたしました。

さいたま市は、いろいろな機会をとらえて機運の醸成に努めているところでございますけれども、先ほど御講演の中にありましたマスコットの選定について、全国で20万クラスの方が参加をしていたのではないかとございまして、さいたま市ではオリンピックの関係もございまして、特別支援学校も含めまして105の学校が参加をしてその選定に当たりました。事務総長の母校、北浦和小学校での取り組みが各メディアで大々的に広報されましたけれども、非常に全国的に見ても大成功であったなと思います。やはりお祭りは子供と女性がいないと盛り上がりがないという言葉がありますけれども、非常に盛り上がったと同時に、すばらしい企画であったなと思いますけれども、今後、子供たちと一緒にこういった機運の醸成を図っていくことについて、現在、組織委員会としては何かプランがございでしょうか。そしてまた、今度やるときはこんなことをやったらいかがかと、そんな点がありましたら御教示願えればありがたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会事務総長 ありがとうございます。本当にいろいろ御協力をいただき感謝しております。

小学校の方々に今後も同じようなチャンスがあるのかということですが、やはり我々はそういうことをやっていきたいと思っております。何かできないか、いろいろアイデアを考えました。例えばマスコットに名前をつけなければいけません。この名前を6月か7月あたりに決めようと思っております。私はこの名前も広く募集したらどうかなと思っております。いろいろ研究したんですけども、マスコットそのものと違って、名前というのは商標上の問題がたくさんあるんですね。要するに似たり寄つたりの名前がたくさんあるわけなんです。そうすると、かなりのプロの人が、そういうことを全て知った人が考えても、なお特許庁に行くと商標登録ができなかったりすることが起こるらしいんですね。したがって、これを公募するのは難しいかなと思っております。

それから、広く投票にした場合、投票法がない以上、不正投票であるかどうかということとはわからないという課題があります。何度も何度も投票するとか、市議会議員選挙であれば法律があって、不正があれば罰せられる、そういうのがないのに投票で決めるというわけにいかないんじゃないかという意見もあります。小学校のクラスであれば、我々は、投票が終わってから、あなたのところはこういう投票内容で本当ですかと問い合わせをして、それぞれ念押しができました。ところが一般国民だとその念押しができません。今のエンブレムを決めるときも、広く意見を募る形をとりましたが、最終的には審査会で決めました。

こういった工夫はこれからもしていきたいと思っております、次に可能性があるのはメダルのデザインですね。これも実は難しいらしいんです、少し立体になりますのでね。単なるデザインでないのが難しいので、これも公募しようと思ったんですけども、公募に条件をつけざるを得ない。かつてそういうデザインを作成したことのある人という条件をつけていこう、こういたしました。小学生の参加ということではないんですけども、できるだけ一般の方々の意見を聞いて参加していただいて、自分たちの考えが反映されているなど、そういう実感を持っていただくこと、これが非常に重要なことというふうに思っております。

○野口吉明委員 ありがとうございます。

○玉井哲夫副委員長 続いてございますでしょうか。

小柳委員

○小柳嘉文委員 小柳と申します。きょうは貴重なお話しありがとうございました。

2点お尋ねできればと思っております。

1点目は、東京オリンピックは、東京は大都市なんで、さいたま市も含めていろいろな自治体が参加して成功に導いていくということになるかと思えます。その中で、さいたま市にはこういうものになってもらいたい、言いかえればさいたま市に期待すること、また、さいたま市民に期待すること、もし何かございましたらお考えをお伺いしたいと思います。

2点目は、東京オリンピックには、今お話いただいたように、お仕事としてかかわっていく人が相当たくさん必要で、またボランティアも、こちらに書いてあるように11万人ということで、相当いろいろな人の手が必要になってくると思えます。今の世の中は人手不足というふうに言われていますので、人をきちっと集めていくというのは、これなかなかしんどい作業ではないのかなと思いつつ拝聴しておりました。この点について何か今後、これからということになるかと思えますが、見通しがございましたらご意見を伺えたらと思っております。

○東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会事務総長 ありがとうございます。

2点目としてお話になった、人手を集めることは非常に苦労しております。8,000人体制を実現するためには約六千数百人これから採用していかなければならない。我々は、1つは、東京都を初めとする地方公共団体の人にぜひいらしてほしいと今お願いしております。これは、いわば国民的なイベントの研修も兼ねて、それぞれの地方自治体に席を置きながらオリンピック・パラリンピックの業務に従事してもらおう。

それから、もう一つはスポンサーが61社ぐらいありますので、そのスポンサーの社員の方々を派遣していただく。ただ、オリンピック・パラリンピックは誰もほとんど経験したことのない、一方で巨大なイベントをマネジメントしていくのは、かなりの難しい仕事だと思います。もう2年ちょっとしかありません。というようなことで、人材の確保はおっしゃるとおり大変難しいと

いうことであります。

それから、最初のさいたま市に何を期待するかということなんですけれども、私どもが最もお願いしたいと思うことは、エンゲージメントでございます。2020年までの2年余りの間にどれだけ盛り上げるかと。特にパラリンピックを我々は非常に重視しております。もしパラリンピックの競技会場が満杯になってチケットを求める人が入れないといって困るくらいになれば、東京大会は大成功したことになるのではないかと思います。平昌のパラリンピックの開会式では、いい席が相当空いていました。テレビを見て気がついた方もおられると思います。チケットは売れているんですね。恐らく企業だとか、関係自治体が主に購入したと聞いていますが、ところがそのチケットは多分、個人に渡ったんでしょうけれども、ぜひ見たいと必ずしも思っていない人の手に入った場合には来ないわけですよ、そうすると席は空いてしまう。

そういうことがないようにするためには、事前におもしろいというか、見てみたいという気持ちを皆さんに持ってもらうということが非常に大事なんです。チケットを売る段になって、ぜひ買ってくださいというのではなくて、ぜひ買いたいなと思うような状況を事前につくり出すこと、これが非常に重要なわけなんです。

それから、オリンピックを見たいと思っている人の割合を調査すると、半分はっていない、パラリンピックの人はもっと少ないという現実があります。私は、2020年ぐらいになると大分ふえてくると思っているのですけれども、今の段階ではそんな程度ですね。ぜひ、それを盛り上げてもらいたいと思います。

少し話が脱線しますがけれども、私はリオで初めてパラリンピック競技を見ました。見ると感激します。あれはぜひ一度見ていただきたいと思います。私は水泳を見たんですけれども、両足の不自由な人たちの競技というのがあるんです。両足が不自由だから飛び込み台から飛び込めないわけですね。したがって、車椅子で来たり、抱きかかえられてきて、プールの中にあらかじめ入れていただく、それでスタートラインに戻ってついて始まるわけです。もう泳ぎ始めるとこれは物すごい速い、とても健常者でもかなわない、まさに水を得た魚のように泳いでいくわけです。

しかし戻ってくると、自分で上がれないんですね、足が不自由だから。手だけを使ってプールの中から自分の体を上げることはできない。そうすると介助者が来て、2人がかりで上げるわけです。それで退場していくわけです。

テレビでは泳いでいるところしか見せませんので、私は、パラリンピックの競技は始める前と終わった後がポイントなんだと思うのです。これを放映してもらいたいと思うのですけれども、時間がない。行くとそうしたことが見られます。そうすると、人間の能力というのはこういうものなのか、人間の意思というのはこういうものなのかということを感じることになるんですね。特にパラリンピックの選手は、例えば健常だった人が20歳前後で交通事故で両足を失い、想像もつかないつらい状態だったと思いますが、生きる意欲を持って、そこまでも大変な試練だと思うのですけれども、その上で、今度はパラリンピックに出てメダルを争う、まさに2度試練があるわけです。したがって、その人たちの考えを聞きますと、本当に皆さんそれぞれ自分の立場をはっきり持っている人たちですね。ああいう人たちをより大勢の人たちに感じてもらえること、これは教育的見地からも非常に重要になるのではないのかなと思いますので、そんなことを考えていただければ大変ありがたいなというふうに思います。

○玉井哲夫副委員長 ありがとうございます。

少し時間が押しておりますので、もし会場の方から、どうしてもこれは聞きたいんだということがあればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○傍聴人 1つ質問があるんですが、祭りを通じて大会の機運を盛り上げていきたいというお話だったんですけども、東京オリンピックという文言とマスコットは勝手に使えないですよね。例えば夏祭りやるときに、東京オリンピックを盛り上げるために組織委員会のほうからこのようなものを買いました、それで住民の方にお伝えするときに、マスコットと東京オリンピックという文言は使っちゃならないですよね。確認です。

○東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会事務総長 お祭りが例えば市町村が主催してやられれば恐らく使うことができます。しかし、大体お祭りというのはスポンサーがついているわけなんですけれども、そのスポンサーが民間企業ですと、結局、お祭りそのものはすばらしいことなんですけれども、応援している民間企業の宣伝になるわけです。ポイントは何かというと、オリンピックを営業に使ってはいけないというIOCの決まりなんです。したがって、そうしたスポンサーの状態、宣伝になっているかどうかのポイントになるんです。オリンピックという言葉を使う、あるいはオリンピックマークを使うときはそういう制約があります。

マスコットについては、今着ぐるみをつくっている最中なんですけれども、この7月24日、2年前イベントのときにはそのマスコットに登場してもらおうと思っているわけですが、このマスコットはいわば俳優と同じだと我々は思っているわけです。したがって、マスコットに来てほしいといったら、俳優と同じように、僕らも民間委託しまして、営業として何がしかの利用者負担をしてもらえば出かけていく。しかもマスコットを何体かつくって、そういう広くマスコットが活躍できるような環境をつくったらどうかということで、今検討している最中、まだ結論まで至っていませんけれども、できるだけ使えるようにします。

東京オリンピック・パラリンピックを支援するためのお祭りというふうについてマークを使うとなると、制限がかかる。ただし、浴衣やはっぴを売っていますので、それを着てやっていただく限りでは、ここにはマークが入っていますが、それは一向に構わない。どういうときならいいのかというのは非常にややこしいのですが、もし具体的な話があるのであれば、組織委員会の担当がいますので相談していただきたい。できるだけできるような方法を我々も考えて、盛り上げていきたいと思います。何となく、これはやっちゃだめ、あれはやっちゃだめというので、JOCが選手の壮行会を公開してはだめとか何とかと言ったので大分批判を受けたんです。選手を管理しているのは我々ではなくJOCなんです、あれは少しJOCが過剰反応したのではないかと思っていまして、あの壮行会はオープンにしてもいいだろうと、学校ですからね。ということで、これは改善いたしました。

この問題がややこしいのは、オリンピック・パラリンピックのマークが一種の知的財産権ということなんです。この知的財産権を誰が使えるのかというのは案外法律的にややこしい問題があるんです。そこが間違えると、オリンピック・パラリンピックのスポンサーは億単位のお金を払っていますから、対価としてその企業に認められる権利があって、何も払っていないけれども私は協力したいんだというだけでそのマークを使えるようにしてしまうと、スポンサーから訴訟を我々起こされてしまう可能性もある。こうした問題もあります、ぜひ相談していただければ、どうやったらできるか、何をどこまでできるかということをお答えしていきたいと思います。

○玉井哲夫副委員長 ご丁寧にありがとうございます。

以上で質問は終了とさせていただきたいと思います。

非常に本日は御多忙の中、この委員会のためにお時間をいただきました。またお立場から、非常に貴重なお話をわかりやすく説明をいただきまして本当にありがとうございます。講演の中にもございましたけれども、大会組織委員会が企画と運営を担っていくんだというお話もございました。事務総長、まさにそのかなめとしてこの大会にかかわっていかれるわけでございます。ぜひ健康に御留意されまして、ますます御活躍いただきますことをお願いいたしまして、終わりとさせていただきます。

ありがとうございました。

それでは、ここで一たん休憩とさせていただきたいと思います。

休 憩（午前11時15分）

再 開（午前11時20分）

○玉井哲夫副委員長 それでは、再開させていただきます。

まず、執行部からの取り組み報告、そして、その後にパネルディスカッションを行いますので、引き続きよろしく願いいたします。

それでは、さいたま市の取り組みとして、オリンピック・パラリンピック部長から報告を受けます。

○オリンピック・パラリンピック部長 今御紹介にあずかりましたさいたま市のオリンピック・パラリンピック部の高根と申します。よろしく願いいたします。

きょうはこのような機会をいただきましてありがとうございます。

さいたま市の取り組みはどういうふうに進めていくかということの説明ですが、ただいま武藤事務総長様から大変詳しい説明もありましたので、重複する部分に関しましてはさらっといきたいと思えます。

概要につきましては書いてあるとおりです。ここについては事務総長のほうの資料がより詳しいので、そちらとあわせて見ていただけたらと思えます。

本市では東京2020大会時、さいたまスーパーアリーナと埼玉スタジアム2002の2会場でバスケットボールとサッカーを行う予定でございます。

次に、これまでオリンピック・パラリンピック部はどんな取り組みをしてきたのかということをご各項目ごとに箇条書きにしたものでございますが、後で主要なところは詳細に説明しますので、ここではさらっと言いますと、まず大会の準備関係につきましては庁内に所管となるオリンピック・パラリンピック部を平成27年4月に作りしました。それで庁内推進本部会議を平成27年5月に設置しまして、民によるバックアップの支援会議を平成28年7月、それら支援会議と庁内推進本部会議の下にサブワーキングというものを平成28年8月に設置しまして行いました。その後、今年度7月にはアクションプランのためのサポート会議を設置して、平成29年1月にはボランティア連絡協議会を設置しました。この辺は設置状況ですが、こういった形で時系列では整理しているものでございます。

内容のほうは、また後で詳しく御説明します。

おもてなしの準備に関しては、大会に向けてさいたま市の目指すおもてなしビジョン、こちらのほうを平成28年5月に策定して、それらを踏まえたアクションプランを平成29年3月に策定し

ました。これのお披露目というか、報告会をアクションプランフォーラムという形で平成29年3月に行っております。

次に、機運醸成ではどんなことをやっているか。これは2016年、2017年と引き続きさいたまスーパーアリーナのほうで子供たちにオリンピック・パラリンピック競技を体験してもらうイベントとしてスポーツフェスティバルを開催しており、今年も5月に行う予定でございます。

また、3年前イベント、1,000日前イベントというのは、基本的には埼玉県推進委員会のイベントに我々も参画した形で、昨年7月と10月に行っているところでございます。

4番目の国際交流は、まさにオランダ空手道連盟と事前キャンプの協定を平成28年12月に締結いたしました。これを踏まえた中で、昨年の10月にオランダから選手が、事前キャンプは桜区にある記念総合体育館というところで予定をしているんですが、そちらにございます桜区の区民のまつりに交流をして参画いただいたのがございましたので、記載しております。

では、これまでの取り組みの中で特に重要な部分について書きましたところを説明させていただきます。

最初に、こちらはおもてなしビジョンに関してなんです。本市がどういったことを目指していくのかということを中心に大きく4つに分けて書いております。

まず、最初の方向性1に関しては、大会の円滑な開催につながる支援策をどんどん推進していこうということでございます。

方向性の2は、特にスポーツ、文化、教育の振興というものを進めていこう。

方向性の3は、地域資源を活用した観光、経済の振興。

最後の方向性の4は、これら方向性の1、2、3全てに絡んでくるのではありますが、先ほどの事務総長のお話にもあった非常に重要な何を残していくのか。そういう大会レガシーを継承していこうということで、これら全てを包括した中で重要なものを次の大会の終わった後も残していこうということ、一応方向性としては整理したものでございます。

これらの方向性を整備した中で、実際には幾つか、12ぐらいのテーマをまずつくりました。これは先ほどの庁内体制、庁内推進本部会議の中で選んだワーキングのメンバーと、民のほうの側のサポートの支援会議、それぞれのメンバーから抽出したいろいろなテーマの中で、熱中症対策や、外国人の急患対応からスポーツの振興、それから文化プログラムの推進や、またはボランティアの検討とか、機運の醸成、さまざまなテーマを包括した中で、これらをアクションプランとして検討していこうという作業を行ってきました。

これは2016年度になるんですが、まさに民間企業の方、医療機関の方、大学生、あとは教育機関の方などさまざまな立場の方々がワーキングを兼ねまして、それらを踏まえた中で取りまとめたアクションプランは、本日配布いたしました資料の中に入っているんですが、おもてなしアクションプランといった形で整理したものでございます。

では、これまでの取り組みではなく、今後はどんな取り組みをさいたま市はやっていくのかといったところで、幾つか整理したものをまず書いてございます。

これは、まず会場周辺の環境整備、どんなことをやっていくのかということなんです。特に会場周辺ということでは、浦和美園駅のホームは、臨時ホームにホームドアがまだ設置されていないので、設置に向けた事業支援をいたします。

また、さいたま新都心の東側に長距離バスターミナルを暫定整備する実施設計を行いますと

もに、今後、駐車場整備を行っていく予定でございます。

また、新都心のにぎわい創出事業としては、新都心の駅前、自由通路にあります大型映像装置も今後の外国人の対応もできるような改修を行う予定です。

また、道路案内標識は当然、東京2020大会に向け、外国の方にもわかりやすい動画案内標識、こうしたものの改善に取り組みますので、こういったことでピクトプログラムの設置も含めた改善工事を行っていきます。

今度はカテゴリー、スポーツの振興なんですけど、先ほど御説明しましたスポーツフェスティバルの関係事業が各種スポーツの紹介、もしくは体験の場として機運情勢にもつながることですので、スポーツへの関心を高めることとしてバスケットボールの競技会場となる、まさにさいたまスーパーアリーナ様でやっているものでございます。さらに来年度ですが、区役所で行っている区民まつり、その中でも少し拡大していこうかなと思っていて、それは本当に小さなミニブースみたいな形にはなりますが、障害者スポーツの体験コーナーみたいなものを区民まつり等で行っていく予定でございます。

また、2会場周辺でも同じような体験ブースを設置できるように、今調整をしているところでございます。

これは、まさに2017年に行いましたスポーツフェスティバルのチラシを拡大したものでございますが、2017年のチラシは5月13日、14日と書いてありますが、2018年は5月12日、13日に、同じ土・日で行う予定でございます。

会場でどんな競技をやっていたかということの簡単な御紹介ですが、バスケットボールでは、先ほど事務総長から3人制というお話があったんですが、スリー・バイ・スリーと言われていた3人制の大会をやっていく、また空手の演武、もしくはスポーツクライミング、まさに若者向けの新しい、追加となった競技ですね。あと、下のほうの3つは障害者スポーツの関係なんですけど、車椅子バスケットボールやボッチャ、スポーツ義足体験などを行ってきました。これらも来年度も同様な形として行う予定でございます。

これは参考ですが、南区の区民まつりで今年度試行的に体験コーナーの設置を行ったんですが、一応ブラインドサッカーの体験とティーボール体験というのをやらさせていただいたので、こうした取り組みを来年度は10区に拡大してどんどん機運醸成を進めていきたいと考えています。

あと、オリパラ教育の推進に関しましては、教育研究指定校の委嘱ということで、指定校を中心とした中で子供たちがさまざまな運動を通したスポーツの意義、価値などに触れたり、共生社会の重要性を学ぶような、まさに先ほど事務総長が求めていたような学習に取り組んでいきたいと思っています。

また、国際ジュニア大使というものも既に活動を行ってまして、この写真はちょうど昨年、桜区の区民まつりに来たオランダの空手選手にインタビューをしている写真なんですけど、こういったことをどんどん進めていきたいと思っています。

ホストタウン交流、まさに事前キャンプ誘致に絡めたものなんですけど、これは今お話ししました区民まつりの、空手の交流の様子を写したものなんですけど、さいたま市空手教室で学ぶ子供たち、または桜区の空手クラブの皆さんも含めた中でお互い交流をするようなものができるような状況です。

あと、これは今現実に具現化しているというか、具現化に向けて今まさに取り組んでいる最中

ですけれども、熱中症対策として、芝浦工業大学、コカ・コーラボトラーズ、これはまさに大会スポンサーの企業なんです、あと富士電機等さまざま企業が官と大学も絡んだ中でクールスポットをつくります。これは自動販売機もしくは少しサイネージ的な情報を流す、それは防災・減災情報が流せるような電光掲示板みたいなものがついている中で、小庭的な緑も配したようなクールスポットをつかって、ここで少し一息入れてもらおうということをイメージしたものでございます。こうしたものができないかということ、今大学のほうとか、企業のほうと合わせて、大宮駅東口まちづくり事務所と環境未来都市推進課も協力していますので、こうした中で、まさにどこかで実践できる場を今模索しているところでございます。

もう一つは、これはさいたま市のヨーロッパの野菜研究会という、さまざまなイタリアの野菜とかをさいたま市でつくって、新鮮な野菜を提供するようなことを行っている団体がございます。その食材をブランド化に向けた取り組みをしまして、例えばGAPの認証というのを取りますと、それが選手村のほうにも供給できるような、そういうクオリティーを確保するそうした取り組みなんです、これは農業政策課と一緒に、連携して、今まさにそういった講習会の開催とか、補助金を交付をして委員会で取り組んでいるところでございます。

あと、ボランティアは、まさに先ほど事務総長から大会ボランティアについて詳細な説明があったんですが、私どもはどちらかというと都市ボランティア、まず会場所在地の自治体としてのボランティアといったものが非常に重要視されるところで、下に赤く3つあるんですが、やはり会場周辺関連のボランティア、あと観光ボランティア、環境美化ボランティアというものが考えられるところでございます。

これをもう少しわかりやすいようにしたのがこちらであって、ドーム型の競技会場が左手側にあると思うのですが、こちらの左手側のほうのグループはどちらかというと会場の関連のボランティア、右側のほうの緑のほうの枠組にあるのが観光ボランティアと環境美化ボランティア、こうした両者のボランティアが一体となった中で都市ボランティアといった形で考えておきまして、特に我々のほうとしては、まさに会場のそばの観光地、こうしたところの観光ボランティア、もしくは環境美化のボランティアを重視することで、会場に来た一般の人たちがさいたま市の魅力にも触れてもらえる、そうしたものができるとして、今ボランティアの連絡協議会を立ち上げまして、いろいろ整備しているところでございます。

では、レガシーについてどういうふうにか考えるかということなんですが、先ほどの事務総長の資料を見る前に我々独自でつくったものなので、後から事務総長の資料を見てびっくりしたんですけれども、市と組織委員会の見ているところが非常に視点が近いので安心しました。

まず、有形のレガシーとしては、ユニバーサルデザインの環境整備、これは当然必要なことだということでもさまざまな取り組みをしているんですが、やはり無形のレガシーとしても、スポーツの振興はもとより、やはり共生社会の実現、これをやっていかなければいけないし、またボランティア文化を根づかせていくことも重要なんで、こうしたものを取り組みの中のレガシーとして残していけたらということ考えています。

何よりも一番残したいものとしては、やはり1人でも多くの市民の方にこの東京2020大会にかかわっていただきたい。それは直接的なかわりだけではなく、間接的なかわり方もあると思うんですが、まさに先ほど野口委員の御質問にあった、大会マスコットの取り組みに小学生がかかわるといこともとても意義のあることだと思いますので、こうした小さなことからどんな

かわり方でも、少しでも多く市民の方が大会にかかわるいろいろなことをやっていただく中で、かけがえのない感動、機運などが残っていただけたらと。本当に我々のミッションとしては重要なことだと思っています。

最後なんですが、本当にボランティアの募集が夏以降にどんどん開始される予定ですので、ぜひ皆様の応募を待っているというところで報告とさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

○玉井哲夫副委員長 報告が終わりました。

ここで渋谷委員長にコーディネーターをお願いいたしまして、パネルディスカッションに移りたいと思います。

○渋谷佳孝委員長 それでは、私がコーディネーターを務めさせていただいてパネルディスカッションを開催させていただきます。

また、ここからは、パネリストとして市職員の都市戦略本部長であります真々田本部長に御参加いただいておりますので、よろしく願いいたします。

また、各会派を代表して1人ずつ参画していただいております。よろしくどうぞお願いいたします。

先ほどの武藤事務総長の御講演、そして市執行部の取り組み状況を御報告いただく中で、それを踏まえて、このパネルディスカッションのテーマとして3項目、3テーマについて皆様に御意見をお伺いしたいと思っております。

まず、1つめとして、いかに多くの市民に大会にかかわってもらえるかについて御意見をいただきたいと思います。

続いて、2つめとして、大会を契機にボランティアをどう根づかせていくか、その前にボランティアをどう集めるかも、御意見があればお聞かせいただきたいと思っております。

3つめとして、大会のレガシーとして何を残すべきかについて、各委員の皆様から御意見等をいただきたいと思っております。

それでは、まず、1つめのいかに多くの市民に大会にかかわってもらえるか、機運醸成の部分ですね、この部分について御意見をお聞かせいただければと思うんですけども、初めに、民進・立憲・無所属の会さいたま市議団、傳田委員より一言いただければというふうに思います。

○傳田ひろみ委員 皆様こんにちは。

トップバッターということで少々緊張しておりますけれども、パラリンピック、なかなか皆さんに関心を持ってもらえないというのが本当に一番の心配事なんですけれども、先ほど事務総長がおっしゃっていたように、パラリンピックのチケットが販売もしくは足りなくなるくらい売れたら、これはまさしく東京大会の成功だとおっしゃっていましたが、本当にそのとおりでというふうに思っています。

今回の平昌パラリンピックでは、村岡桃佳選手が5つもメダルを取ったということで、非常に世間的に注目いただいております。どうしたら市民の皆様の関心を集められるかと私なりに考えてみましたけれども、私、障害を持っておりますので、主にパラリンピックの関連から見てお話をさせていただきます。

まず、マスコミを中心に積極的な情報発信、これが必要ではないかなと思っています。今回、NHKもかなり力を入れていて、生中継とか、それから障害者リポーターを3人選んで、平昌に

も派遣してというような力を入れてくださったようです。

それから、元SMA Pのメンバー3人ですけれども、その方々の新曲を発表されて、その新曲の売り上げの一部をパラスポーツに寄附してくださったというようなことも新聞報道で拝見しました。

平昌に関しては結構盛り上がっているんですけれども、こうした盛り上げを東京までいかに持続させるか、その辺のところが大変なところかなということと、やはりこのパラスポーツ、さっきも御説明ありましたけれども、誰にとっても身近なスポーツにしていければ、より関心が高まるのではと思っております。

私からは以上でございます。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

パラスポーツについて御意見をちょうだいしました。

続きまして、自由民主党さいたま市議会議員団 土橋委員

○土橋勇司委員 皆様、こんにちは。自民党の土橋と申します。

最初の、いかに多くの市民に大会にかかわってもらおうかというところでございますが、東京オリンピックが決定した日、私、今調べましたらもう5年前なんですね、2013年6月。たしか朝方だったと思うんですが、決定をして、それから多分、1週間ぐらいは、もうその話題で持ち切りだったようなことを私もよく覚えております。それから5年もたってまだ開催をしていないので、なかなか機運に対しては波があるとは思いますが、ちょうど今が少し落ちついてきてしまったところなのかなと思うところで、平昌オリンピックがあって、また改めて、もう2年後が東京オリンピックなんだと皆様思っているんだと思います。

この機運の醸成ということもそうなんですが、事務総長からもチケットの売れ行きのお話がありました。どうしてもこのオリンピックの話があると、種目だったり、対戦カードであったり、チケットが余っているのではないかという報道がある中、さいたま市としても、今はネットを使えばすぐわかることだと思うんですけれども、チケットの状況が把握ができるのであれば把握をしていただいて、ぜひ小学生、中学生に生で観戦をしていただきたいと思っておりますので、教育委員会を含めて、その辺の取り組みが必要なのかなと思っております。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

生で市民の皆様を観戦できる機会を多くという御意見をいただきました。

続きまして、公明党さいたま市議会議員団 宮沢委員

○宮沢則之委員 どうも皆さん、こんにちは。公明党の宮沢と申します。

きょうはパネラーという立場を仰せつかりまして、この委員会で今まで参考人のいろいろなお話を聞かさせていただいた中で、二、三述べさせていただければなと思っております。

オリンピックは間もなくもう2年ということで、日本で行われる理由は何かなということを考えますと、やはり日本は世界でも超高齢化といった社会です。その中でオリンピックをやるということは、世界からの注目を受ける一つではないのかなと考えております。そういった意味では、日本はモデル的に、多様な世代にわたって市民の方が参画できるような大会であるべきだと強く感じております。

その上で、オリンピック憲章の中でスポーツと文化の教育の融合をうたっているわけですが、このスポーツと合わせた文化と教育ということで、先ほど来からもお話がありましたお子

様に対する教育の場でのプログラムでありますとか、あとは地域での伝統の継承、若い世代に伝えていく人形でありますとか、漫画でありますとか、盆栽でありますとか、こういった伝統を中心としたプログラムというんでしょうか、こういったものを連動してやっていくことというのは非常に大きな効果があると感じられております。

こういった動きに対して、草の根から起きていくそういった運動に対してどれだけの支援を行っていくかというのがポイントになるのかなと考えているところでございます。どうか、さいたま市でも積極的な取り組みをお願いしたいと思っております。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

当市の伝統文化を生かして市民参加を広げるようなプログラムを支援していくべきだという御意見でございました。

続きまして、自由民主党真政さいたま市議団 金井委員

○金井康博委員 今、武藤事務総長のお話なども伺って、やはり多くの方にオリンピック・パラリンピックをもっと見に来ていただきたいという部分で、今まで行われていた平昌オリンピックを思い返すと、恐らく皆さんカーリングの試合を見ていたのではないかなと思います。見られていて、多分、最初のうちルールもよくわかっていなくて、そのうちだんだん盛り上がっていくにつれてルールを皆さんわかってきて、何となく最後の3位決定戦になって注目されたというところを考えると、やはりいろいろな種目のルールをしっかりとわかって見ていただくということもやっぱり大事なのかなと。

そうすると、それぞれの競技に対して興味を示していただくという部分では、先ほどさいたま市のスポーツフェスティバルのことがございましたが、もっといろんなところで、公民館のお祭りとか、小さなお祭りとかでも競技のこと、ルールをしっかりと覚えていただく、そして小学生などでは土曜チャレンジなどやっていますので、そういった中でも競技に関して関心を示していただくことで、皆さんがもっと大会に魅力を感じていただける、そんな形になるのではないかなと思っております。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

市民の身近なイベントでもっとオリンピックに興味を抱いていただく体験をぜひ多くしたらという御意見だったかなと思います。

続きまして、日本共産党さいたま市議会議員団 久保委員

○久保美樹委員 久保と申します。よろしくお願ひいたします。

いかに多くの市民にかかわってもらうかというところで、スポーツはもちろんですが、文化プログラムにおいて市の文化芸術都市創造条例を生かして、幅広い分野の芸術家や芸術団体に声をかけて、さらに住民の参加を求めていくこと、それらが大変重要だと思っております。それに向けて広報活動の強化や情報公開を進めていければよいのではないかと考えております。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

さまざまな御意見をいただいたところでございますけれども、それを踏まえて、真々田本部長より全体の総括をお願いできればと思っております。

○都市戦略本部長 総括なんて、そういう偉い立場ではありませんが、私なりの考えることを述べさせていただけたらと思っております。

委員の皆様から具体的な、前向きなといえますか、すごく積極的な御提案をいただきまして、

ありがとうございます。先ほど部長の高根から私ども執行部、市役所としての取り組みについての具体的なお話は申し上げましたところでございますけれども、それに沿う形で、さらに突っ込んだただいまの具体的な提案をいただきましたので、それらをしっかりと進めていきたいと考えているところです。

一つ、私は今年59歳になりますけれども、東京オリンピックは昭和39年でしたから、たしか私が5歳のときでした。まだ5歳でしたので、当時の細かい競技の結果とかいうものは覚えておりませんが、10月10日のあの大会の開会式の模様を、テレビは白黒でしたが、白黒テレビで見たときのあのどきどき感、わくわく感というのだけは今でもよく覚えております。

それを思いますと、これからあと2年余りの間にやはり子供たちのためにわくわく感、どきどき感というものをどんなふうにつくっていけるかなというところを一番しっかりとやっていきたいなと考えております。

そういう意味からしますと、先ほど来お話が出ておりました大会のマスコットを、小学生を対象とした総選挙、これなんかは非常に子供たちにとってはわくわく感をつくる第一歩としてすごくすばらしい取り組みだったなと考えております。

それに続きまして、組織委員会のほうでもいろいろとこれからも子供たちのためのというところをお考えいただいているようですけれども、さいたま市がさいたま市として子供たちのわくわく感、どきどき感をどんな形で作っていくかというところもしっかりと検討して、考えて、教育委員会とも協力し合いながら、そういったものを演出していけたらというふうに考えております。

○渋谷佳孝委員長 真々田本部長、ありがとうございました。

申し訳ありません、時間が大分押しております、少し詰めて進行させていただければと思います。

先ほど3テーマと申し上げたのですが、この次の2つめ、3つめを一緒に取りまぜて御意見をいただければと思います。大変恐縮ですが、よろしく願いいたします。

大会を契機にボランティアをどこで根づかせるか、また大会のレガシーとして何を残すべきか、それぞれ御意見をお伺いしたいと思いますが、ランダムに御指名させていただければと思うのですが、宮沢委員からいかがでしょうか。

○宮沢則之委員 それでは、私の考えというか、御意見を申し上げさせていただきたいと思います。

大会を契機にボランティアをどう根づかせるかという話ですけれども、ボランティアに参加をされたいという方は、全体の半分以上の方がそう思っている中、実際にボランティアを体験したという方が20%から25%程度にとどまっているというこの現実をよく考えていかなければいけないと思っております、その要因は一番何かというと、やはりボランティアをする時間が確保できないという背景があるのではないかなと考えております。

私の考えとしては、あくまでもさいたま市の話なので、例えば市内の民間企業との間におけるボランティア活動がしやすい状況というか、休暇がとりやすいような状況をつくり上げていく。または、ボランティアの体験をされた方の話が各種イベントで皆さんのところに届くような、またあと参加しやすい、一つ一つのシステムを公開できるようなシステムと発信する場所をつくっていくということが非常に大事ななと思っております。

3点目の大会のレガシーということで何をやるかということでございますけれども、関連する

んですけれども、このオリンピックが開催地であるというのを大きな起因として、さいたま市ではスポーツコミッションの体制強化とかを今後図っていくということでございますので、こういった機会に、例えばスポーツに特化したボランティアバンクとかを創立をして、スポーツコミッションの中でうまく継続的にその方たちが連携をし合って、参加できるときもあるけれども、参加できないときもあるけれども、いざとなったら何かに協力がすぐにできるというような体制の構築というのは残していければいいのかなと思っております。

○**渋谷佳孝委員長** ありがとうございます。

金井委員

○**金井康博委員** ボランティアをどのように根づかせるかということですが、ボランティアに関して意識という部分がなかなか向上しないという部分で、やはり学生ボランティアもふやしていくべきかなと思っています。さいたま市も市内でいろいろなイベントをやっていますが、そういった中でボランティア活動をしていただくという部分では、やはり中学生、高校生の方々に対して、学校でもですが、ボランティアというのはどういうことだよということを教えていく、そして、そのボランティア活動をすることによって新しく自分が身につくこと、発見すること、そういったことも機運になるのではないのかなというふうに思っております。

そして大会のレガシーということですが、大会の入場者が少ないという部分を懸念するということもありますので、何か魅力的なことをするという部分で、クランピング、これ情報ですが、グラマラスとキャンプ、魅力あるキャンプということで、設備が整っているキャンプの状況のところに泊まりに行くということで、埼玉県も自然豊かなところがありますので、グランピングをして、そして次の日に大会を見に行くとか、何か新しいそういった取り組みなどもして、多くの方に魅力を持っていただく、そしてさいたま市の自然というのを今後も味わえるようなグランピングというのもいいのではないかなと思っております。

○**渋谷佳孝委員長** ありがとうございます。

続きまして、土橋委員

○**土橋勇司委員** まず1つ目のボランティアについてですが、きょうもたくさんいらっしゃる中、東京オリンピックのボランティアをしようかなと思う方いらっしゃいますか。ありがとうございます。

高校生もいらっしゃるのかな、高校生もあと2年後ですけれども、ぜひボランティアをやっていただきたいなと思います。

さいたま市はスポーツのまちといわれているというか、言っていて、自転車だったり、マラソンだったり、その他さまざまなスポーツ大会がございます。その中でもボランティアでやっていただいている方、さいたま市の中でもたくさんいらっしゃるのかなと思いますが、先ほどの事務総長のお話の中でも、やはり最初の顔になるわけですね。海外からお客さんが来て、ボランティアの方の笑顔が一番に接するというので、なかなか簡単なことではないんだと、研修が必要だということも言っておりましたので、行政としても、きちんとボランティアとはどういうものか、なるべくハードルを下げたような形でさいたま市の方に一人でも多く御参加をいただけるような仕組みづくりが必要なかなと思っております。

また、大会レガシーというところですが、成熟した都市であれば、国家であればあるほど、世界的なスーパービッグイベントのオリンピックというものの開催の仕方というのは難しいもの

だなど思っております。2000年のシドニーだったり、2012年のロンドンであったり、もう物があふれかえっている中でオリンピックをやって何が残るのかというのは、本当にこれからもずっと続く議論なのかなと思っております。

有形、無形というものがございます。さいたま市でもオリンピックに合わせて新たなスポーツインフラですとか、新たな博物館のようなものもできますが、私は、無形のほうにも力を入れていくべきかなと思っております。

せっかく世界的に大勢の人が来るわけですから、ぜひ子供たちには国際的な感覚を身につけていただいて、このオリンピックを契機に日本であったり、世界の未来ということの思いを思いめぐらせるような感覚的なレガシーが残ればいいなと思っております。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

続きまして、久保委員

○久保美樹委員 ボランティアにボランティアをしてよかったなと思っております。気持ちよくボランティア活動をしていただくために、例えば今、障害者のボランティアをしている方から、さいたま市の駅周辺にはトイレが非常に少なく大変な思いをしている、そんなことでボランティアが長続きしないんだというような声も届いております。そのことから、トイレというのはとても重要でないかと思っております。みんなもトイレを初め、バリアフリーのまちづくり、ユニバーサルデザインを推し進めていくことが大事だと考えております。

また、先ほど御講演の中にもありましたが、オリンピック・パラリンピックの大事なことは、国際交流だと思っております。オリンピック・パラリンピックを契機に外国人や社会的マイノリティーと言われる人々の人権、そして多様性が尊重される、そんな優しい心を生み出して、そして大会のレガシーにしていければいいなと考えております。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

最後に、傳田委員

○傳田ひろみ委員 残念ながら、パラリンピックの競技種目はさいたま市では行われないうことらしいんですけども、やはりオリパラを見に来た方々が観光施設をめぐるということがありますね、氷川神社もあります、それから鉄道博物館もあります、盆栽美術館もあります、そうした観光施設に観光に来たお客様の中には、高齢の方、それから障害を持っている方々もいらっしゃるのではないかとこのように思っています。

まちの中でお手伝いを必要とする、そういった方々に会ったら自然に声をかけられるような、そんなまちにさいたま市がなっていったらいいなというふうに思っておりますし、じゃあ、そうするためにはどうしたらいいのか。やはり基本的な車椅子の扱い方だとか、それから視覚障害者への声かけとか、そういうことを学校とか、それからボランティア団体などを通して学ぶ機会をふやしていけたらいいなと思っております。

それと、最後のレガシーですけども、久保委員と重なる部分もあるんですけども、東京オリパラを機に共生社会の実現とか、心のバリアフリー、これは国のほうでもうたっておりますけれども、ぜひともこういうことをレガシーとして残していただきたいんですけども、残念ながら民間によるアンケートによると、まだまだ、障害者への理解が進むと回答した人が13%に過ぎないということ、ハード的なバリアフリーというのは目に見えますけれども、ソフト的なバリア

フリーというのはなかなか目に触れることができません。こうしたことを進めていくと同時に、とにかく多様な方々への理解が進むまちづくりをしていければなと思っております。

先ほど事務総長がおっしゃっていたように、ユニバーサルデザインのまちづくりと、それから多様な人々を認め合うインクルシブ社会の実現ですか、こういうことがレガシーとして残っていれば、本当に東京オリンピックは大成功ではないかなと思っております。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

各委員の皆様、貴重な御意見ありがとうございました。

最後に、真々田本部長から、市の取り組み状況も踏まえて御意見をいただければと思います。よろしくをお願いします。

○都市戦略本部長 各委員の皆様、どうもありがとうございました。

おっしゃるとおりで、私のほうから申し上げるようなことはもうないぐらいの御発言をいただきまして、ありがとうございました。それらをしっかりとやっていくということに尽きるのかなと思っております。

御案内かと思えますけれども、さいたま市にはさいたま国際マラソン、それからさいたまクリテリウムといった大きなイベントを通じまして市民の方々がボランティアに参加いただけるという土壌がある程度できているなと理解しております。その上で、このオリンピックのボランティアという機会を通じまして、その裾野が広がって、結果、このさいたま市にボランティア文化というものが、スポーツ大会をきっかけとしたそういったものもしっかりと定着していくということが一番大きなレガシーになるのかなというふうに考えております。

その他にもいろいろと御指摘のようなレガシーということはしっかりとうたっていきたいというふうに考えておりますが、その上で、やはり来られた方々には、何もボランティアでなくても、外国人の方、困っていそうな道を探しているような人、そういう方がいらっしゃったときに、「どうかしましたか」「お困りですか」という何かちょっと声かけをしてくれる、そういった市民がボランティアでなくてもできるだけ多くこの大会にかかわれるような形で御参加いただければ、そんなことを準備できたらなと考えておりますので、引き続き市民の皆様方、議員の皆様の御指摘、御指導をいただきながらしっかりと準備を進めていきたいと考えておりますので、よろしくをお願いいたします。

○渋谷佳孝委員長 ありがとうございます。

この後、意見交換をするという予定でございましたが、もう閉会の予定の時刻を過ぎておしまして、もしどうしてもという方がいらっしゃればお伺いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

このようなパネルディスカッションを開催させていただきましたのは、皆さんと一緒にこのオリンピックに向けて盛り上げていきたいという趣旨でございます。委員会でもさまざまな議論を行っております。もしよろしかったら傍聴等にもいらしていただければと思っております。

これからもどうぞご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

以上で本日の議事は全て終了いたしました。

これをもちましてオリンピック・パラリンピック競技大会支援特別委員会オープン委員会を閉会いたします。

散 会（午後0時05分）